

英語でのサイテーションの基礎知識を整理する

— APA とシカゴ・マニュアルの最新版を中心に —

宮澤 淳一

青山学院大学総合文化政策学部

An Introduction to English Citation Practices:
Essential Background for Applying the Latest APA and Chicago Styles

Junichi Miyazawa

School of Cultural & Creative Studies, Aoyama Gakuin University

要旨：学生・研究者に対してサイテーション (citation) とは何かを問いかけ、その要点を整理する。『音楽の文章術』(1994) の付録マニュアル作成以来の実践を踏まえ、最新の『シカゴ・マニュアル』第 18 版と APA 第 7 版を手がかりに検討する。サイテーションを広義 (行為自体) と狭義 (表記法) に分け、注・文献表方式 (notes-bibliography style) と著者名・発行年方式 (author-date style) の発想を比較する。さらに句読法、スペース、イタリック、大文字使用法、all-caps と「オシャレ表記」、ハイフンとエヌダッシュ等の「マニュアル以前」の基礎知識を整理する。注の記述は、情報の羅列ではなく、英語の文法に則ったセンテンスを成すことを確認し、電子・オンライン資料の増大とマニュアルの版改訂も視野に入れて、欧語文献と日本語文献を整合的に併置する課題を示す。サイテーションは、他者の知への敬意を示し、自分の研究を位置づける作法であり、研究の信頼性を確保する基本的なリテラシーである。

キーワード：サイテーション、スタイル・マニュアル、文献表記法、句読法、大文字使用法、引用、オシャレ表記、所収

1. 音大生必携マニュアル

この発表は、英語圏のスタイル・マニュアル、とりわけ *Chicago Manual of Style* と APA の最新版を手がかりに、サイテーションの基礎知識——さらにそれ以前に求められる知識——を整理するものである。

アカデミック・ライティングに対する私の積極的な関与は、1994 年 4 月に共訳書である Richard J. Wingell の *Writing about Music* (邦題『音楽の文章術：論文・レポートの作成

から表現の技法まで』）を出版したときにさかのぼる（ウィンジェル，1990/1994）。オビには「音大生必携マニュアル」と書かれたように，音楽学を研究する学生を想定した「論文・レポートの書き方」の本である。原題どおり「音楽について書く」とはどういうことか（どうやったら「感想文」ではない，研究として意味のある文章が書けるか）を実践的に取り上げた本だった。日本で前例のない本だったためか，それなりに注目された。

実際，「音楽について書く」ことのへの問いかけは意義深かったし，本書はリサーチのやり方や執筆のプロセスの助言など多くのことを教えてくれたが，私が特に啓発されたのは，アカデミックな文章を書くときのスタイル（style）を統一することの重要性だ。北米では，論文執筆の際の文献表記法が厳密であり，英語圏では頼るべきスタイル・マニュアルがいくつかあること，音楽学の分野で主流なのが *Chicago Manual of Style*（CMOS;『シカゴ・マニュアル』）と，そのうちの文献表記法をダイジェストして学生用にまとめた，いわゆる *Turabian*（トゥラビアン）であることを学んだ。

ウィンジェルは *notes*（注）の書き方についても説明が具体的だった。単行本，論文・記事，参考図書類の記述法と，構成要素それぞれの意味や注意点を示していた。またその記述が *bibliography*（文献表）とどのように異なるかも教えてくれた。注と文献表の書き方を区別することは，日本の大学ではあまり浸透していない流儀であったので（今なおそうかもしれない），新鮮だった。

しかし，原書が英語なので，これらの例示は英語の文献ばかりである。日本語の文献はどう記述したらよいのか。日本語で書く論文・レポートでは，日本語文献も当然扱う。それらと欧語文献をどのように同居させ，また注と文献表ではどう書き分けるのか——。これは実は今なお本当の意味では決着のついていない問題なのだが，私なりに納得のいく形を作っておこうと考え，邦訳の出版にあたり，「文献（・資料）の書き方」という30ページにわたる付録編を巻末に作成した。そこには，単著，共著，シリーズものの1冊，単独訳書，共訳書，単行本の1章，雑誌論文，新聞記事，演奏会評，事典項目，学位論文，インタビュー，楽譜，録音，録音解説など，当時の『シカゴ・マニュアル』の最新版（1993年の第14版）と格闘しながら，演繹的に英日双方の記述例を注と文献表の書き方のセットで掲載していった。この付録編は，少なくとも当時としては，人文学において日本でいちばん詳しいスタイル・マニュアルになったと自負している。

おかげさまで『音楽の文章術』は10年を超えるロングセラーとなり，2008年4月には11刷が出版されたが，その間に原書は版を数回改めていた。オンライン資料の扱い方や，文献表記法の説明が拡充され，2009年には第4版が登場したため，邦訳の内容が陳腐化した。実際，邦訳書の初版はインターネットが普及する「前夜」であったため，付録編も，それ以降に登場した電子資料やオンライン資料，ウェブサイト，ブログ，電子メール，SNSの投稿，YouTube動画などの記述法に対応できていなかった。私と共訳者は2014年6月に『改訂新版 音楽の文章術：論文・レポートの執筆から文献表記法まで』を出版し，これらを網羅した新しい「文献・資料の書き方」を付録とすることで，懸案を解消することができた。

もちろん、それからさらに 10 年以上たっているのだから、さらなる増補が必要であるし、根本的に改めたい点も実は残っている。たとえば No. の後に置くべきスペースを欠いた箇所があったこと、ページ範囲を示す際に hyphen (ハイフン) ではなく en dash (エヌダッシュ) を用いるべきであったことなどである。いずれもよく見かける不備ながら、日本ではこれを誤りだと指摘されることは少ない一方、欧米では好ましくない (後述)。本来、学術の世界では、こうした細部こそが信頼できる研究の前提として重視されるのである。そこで今回は、こうした文献・資料の書き方がいちばん関わるサイテーションについて考えてみよう。

2. サイテーションとは何か

英語圏の大学では citation という言葉は一般的なアカデミック・ライティングの用語と考えられる。しかし、「サイテーション」という片仮名は、日本の大学で誰もが口にする言葉ではない。また、これを用いない「論文・レポートの書き方」の本も少なくない。citation は「引用」に近い言葉だが、「参照」の意味合いもあるので quotation の同義語とは断言しにくい。citation とその動詞の cite には、もっと広い意味が含まれている¹。

私は、サイテーションを広義と狭義に分けて捉えている。広義のサイテーションとは、「調べて得た既存の知識や他人の考えを、自分が公表する著作の中で、紹介し、活用する際にソース (典拠) を示す行為と技法」である (宮澤, 2020, p. 87)。直接引用、パラフレーズ (言い換え、間接引用)、要約といった技法を駆使して行なう (なお、パラフレーズと要約は日本の著作権法に触れるとする声のあることは知っておこう²)。また、厳密にはサイテーションには分類されないかもしれないが、特定の文献の存在を言及 (mention) することもここに加えることができよう (宮澤, 2020, p. 94)。

これに対して、狭義のサイテーションとは、上掲の定義の「技法」の部分である。つまり、ソースをどのような形式で記述するか、すなわち出典表示の方法を意味する。著者名の順序、刊行年の位置、ページ範囲の示し方、句読点や記号の用法など、厳密に規則が決められ、それが共有されていなければ、読者は典拠にさかのぼって、議論を検証したり、その資料を活用することが困難になるかもしれない。また、サイテーションをすることは、典拠である文献・資料をすぐれた業績とみなし、その著者や関係者に対して敬意を表することにもつながる (宮澤, 2020, p. 90)。

よって、厳密で誰でも過不足なく、かつ誤解なく情報共有がなされることが期待されるならば、サイテーションに自己流は好ましくない。少なくとも学術論文では (また、学生が授業で課されるレポートなどでは) 共有される規則に則って記述するべきで、そのための目安や根拠として各種のスタイル・マニュアルが存在するのだ。

3. スタイル・マニュアルの 2 つの方式

教義のサイテーションである出典表示の技法は、それぞれの学問分野での慣行があったり、学会が独自の規則を設けていたりもするが、文系を見渡すところ、英語圏で広く参照

される有力なスタイル・マニュアルはいくつか存在する。あえて2つのみ挙げるならば、シカゴ大学出版局の *Chicago Manual of Style*（以下『シカゴ・マニュアル』）と、アメリカ心理学会（The American Psychological Association）のいわゆる APA 方式である³。

『シカゴ・マニュアル』は1906年に始まる長い歴史を持つ包括的なマニュアルであり、印刷・編集実務のノウハウも蓄積されている。最新は2024年発行の第18版である。その文献表記法は、英語の文法や句読法との親和性が高く、文章の自然な流れの中に出典情報を組み込むことを重視する傾向がうかがえる。その中核は**注・文献表方式**（notes-bibliography style）であり、**注**（footnotes または endnotes）と**文献表**を区別し、それぞれ異なる記述形式を採用する。注の1行とは、ピリオドで終わる1個のセンテンス（文）である。途中は、カンマを多用して情報を区切るが、英語の文法や句読法にのっとったものであることに気づいてほしい。これに対して文献表では情報のブロックがピリオドを主体に区切られているが、やはり文法や句読法が見え隠れし、主語や動詞がなくても、そこに説明のディスコースが存在している。

1954年にさかのぼる APA 方式は、本来はアメリカ心理学会が自分たちの至便を考えて作ったもののはずだが、社会科学の分野でも使われるし、英語学などでも好まれており、本学のアカデミックライティングセンターの紀要もこれを採用している。特徴的なのは、**著者名・発行年方式**（author-date style）を採用していることだ。論文の末尾に参照リスト（reference list）を置き、本文では parenthetical citation と呼ばれる（著者名，発行年）を示す方式を取る点である⁴。『シカゴ・マニュアル』の注・文献表方式では、いちいち注番号から注をたどり、どんな文献や注釈が記されているかを確かめなくてはならないが、著者名・発行年方式では、読者は議論の流れの中で、参照される研究が誰のいつのものかを即座に把握できる利点がある⁵。また、参照リストでは、著者名のファーストネームやミドルネームをイニシャル化したり、タイトルの大文字使用法においてもヘッドライン方式とセンテンス方式を細かく使い分けることを指定しており⁶、イタリック（斜体）とローマン（立体）を組み合わせ、意外にも、引用符は用いない。読む場合はとにかく、この約束事をきちんと理解して記述するにはかなりの負荷が求められよう。マニュアルの構成も個性的で、サイテーションだけ調べたい人には特定の情報にたどりつきにくい。もともと英文法、句読法、文章構成法の予備知識があり、さらにマニュアルに慎重に当たらないと難しい。

『シカゴ・マニュアル』の注・文献表方式と、APA の著者名・発行年方式を比較すると、前者は注で文献のデータをじっくり読ませることを重視し、後者では研究成果の情報としての検索の至便性を優先しているのかもしれない。どちらが優れているかと問うても意味がない。それぞれが異なる学術分野の要請になじんでいるということであろう。

なお、著者名・発行年方式は APA だけが採用しているわけではない。従来より「ハーバード方式」（Harvard system）と呼ばれて認識され、さまざまな型がある。また、案外知られていないかもしれないが、『シカゴ・マニュアル』にも著者名・発行年方式が存在する。『シカゴ・マニュアル』やトゥラビアンには（そして『改訂新版 音楽の文章術』の付録にも）、

両方の方式が載っている。実際、『シカゴ・マニュアル』の著者名・発行年方式は APA よりもオーソドックスな英文構成法にのっとっており、直感的に記述しやすい。個人的には推奨したい方式である。

また、どのマニュアルに準拠するにしても、最新版の出版には敏感でいたい。最新版を利用するかどうかは別として、旧版からの変更点を把握しておくことが望ましい⁷。『シカゴ・マニュアル』での最新の大きな変更点は、第 17 版（2017 年）までは、書籍の出版地（place of publication）を書くことになっていたのが、最新の第 18 版ではそれが廃止された。これは知っておいてほしい⁸。

いずれにせよ、これら 2 つのマニュアルに限らず、よくできたマニュアルであれば、カンマやピリオド、イタリック等の使い方にも、カッコ類や数字の使い方にも、構成要素の位置や出沒などにも、必ず意味がある。それを読み解いてこそマニュアルが使えるので、学生や研究者は「マニュアル・リテラシー」を磨きたい。マニュアルの背後には、それを用いる学問分野において何が重視されるかという価値判断や思想も隠れているし、それを理解すると、研究者のあなた自身がどんな価値観を重視しているのかという問題とも向き合うことになるだろう。このリテラシーを磨くには、少なくとも 1 つ、できれば複数のスタイル・マニュアルに親しみ、違いを知ることが望ましい。それは、複数の外国語を学べば、比較によってそれぞれの言語の理解が深まることと似ているかもしれない。

4. スタイル・マニュアル以前のリテラシー——句読法・記号・大文字使用法など

このように、それぞれのスタイル・マニュアルの本質を理解することは重要である。しかし、その前提となるものがある。すなわち、英語の文法、句読法や記号体系に関する基礎的なリテラシーである。これが欠けていると、どれほどマニュアルを参照しても正確な理解ができず、記述は難しい。以下、多くの日本語話者が不徹底であったり、誤解をしている用法について、いくつか記す。

まず、**句読法**（punctuation）について理解しておきたい。注は、それぞれが独立したセンテンスだと考える。主語・動詞が省略されていても、センテンス内の約束事に従う（カンマにはすべて意味がある）。

またいろいろな**記号**を理解しておきたい。**コロン**と**セミコロン**の違いはわかっているだろうか。私の場合、コロンは「すなわち」を表すボタンであって、そこをクリックすると箱が開いて中が見える（あとに続く文字列）のようなイメージで捉えている。セミコロンは等価の語句や節の列挙に使う。これを逆に理解している人がいるので気をつけてほしい。

ダッシュには**エムダッシュ**（—）と短い**エヌダッシュ**（-）があり、さらに別個のものとして**ハイフン**（-）がある。エムダッシュは文中に語句を挿入するときの前後に置く記号だ。エヌダッシュはページ範囲を示す際に用いる。ハイフンではない。たとえば、pp. 25-26 ではなく、pp. 25–26 である。北米や欧州の大学や学術出版では、この区別は厳密であり、ハイフンで代用することは形式上の誤りと見なされる場合もある。ゆえに、ページ範囲をハイフンで示すレポートは好ましくない。ドイツに留学した私の知人の指導教授は、

ハイフンでページ範囲を示した提出物を一切受け取ってくれなかったという。日本語環境では意識されにくい問題である。エヌダッシュは呼び出しにくい特殊記号なので、日常的にハイフンで代用するのは結構だが、学術論文を書いたときには最終的にエヌダッシュに改めてから脱稿するのが望ましい（こういう特殊記号は、単語登録をするなどの工夫があるとよいかもしれない）。

さらに、**大文字使用法**（capitalization）の問題もある。ヘッドライン方式とセンテンス方式の違いを理解していないと、これを細かく使い分ける APA 方式では記述が困難だ。

all-caps（語句の全部が大文字で表記されること）にも注意したい。書籍の表紙に題名がすべて大文字で印刷されているからといって、注や文献表や参照リストではそのまま転記してはいけない。それぞれのマニュアルにのっとった大文字使用法で改めて転記する。

ここでクイズだが「映画『スター・ウォーズ』は1977年に公開された」（『エピソード4/新たなる希望』のこと）を、英語ではどう書くか？

- A. STAR WARS was released in 1977.
- B. "STAR WARS" was released in 1977.
- C. *STAR WARS* was released in 1977.
- D. Star Wars was released in 1977.
- E. "Star Wars" was released in 1977.
- F. *Star Wars* was released in 1977.

——世の中ではどれも見かけるかもしれない。しかし、大学の論文・レポート（文系）で適切なのは大文字小文字混じりでイタリックにした F のみである。『スター・ウォーズ』のロゴは常に all-caps で STAR WARS と表記されているが、それは *stylized title* と呼ばれ、いわば「**オシャレ表記**」である。これに惑わされてはいけない（私はこれを「STAR WARS 問題」と呼んで、学生への指導のために解説動画を作った⁹⁾）。

イタリック（斜体）と**引用符**の使い分けも注意したい。大文字使用法との兼ね合いも含め、マニュアルごとに規則がある。

スペースにも意識的になろう。たとえば、前にも述べた、No. の処理はどうか。その後にスペースを置くべきか否かという問題は、一見すると些細に思える。しかし、これは単なる見た目の問題ではない。No. は **number** という単語の略記であり、略記の後には語としての単位が続く以上、語間のスペースを置くのが英語の発想である（p. や pp. のあとも同様にスペースが求められる¹⁰⁾）。逆にスペースを置かない語結合もある¹¹⁾。

改めて、**注**（notes）の記述を考えてみよう。注は単なる情報の羅列ではない。カンマやピリオドによって構造化された1個のセンテンス（文）である。したがって、語順や時の表現、出版年の位置なども英語の文法的秩序に従う。出版年が文末に置かれるのは偶然ではなく、時間の副詞（副詞句）をセンテンスの最後に配置する英語の基本的な語順と無関係ではない。注や文献表を記号の集合としてではなく、言語として理解する必要がある。

最後に、次元の異なる例だが、雑誌（ジャーナルやマガジン）の **volume**（巻）と **number**（号）の違いも知っておくべきだろう。雑誌の個々の1冊は **number** である。基本的に1年単位でそれを束ねたものが **volume** である（従来、図書館では雑誌を **volume** ごとに製本して所蔵してきた）。これについては出版界でも誤解している人が多いのか、個々の号に Vol. ～と英語で記載している和雑誌がよくある。APA 方式で興味深いのは、雑誌名はヘッドライン方式のイタリックだが、**volume** の算用数字までをイタリックにすることだ。これは「巻」が大きなまとまりであることを示しており、ある意味で合理的である¹²。

これらの例は、最後の例はともかく、いずれも高度な専門知識を要するものではない。しかし、日本の学校教育では英語の句読法や記号体系が体系的に教えられる機会は多くない。その結果、アカデミック・ライティングの段階で初めてこれらの問題に直面することになる。スタイル・マニュアルを使いこなすためには、その前提としてこうしたものを教える機会が教育の現場で求められよう。

5. 日本語文献との整合性——残された課題

ここまで、主として英語圏のスタイル・マニュアルを前提に議論してきた。しかし、日本を拠点とする研究者が直面する問題は、英語の規則を理解することにとどまらない。日本語文献も扱うのであれば、それらと欧語文献をいかに整合的に併置するかという課題に直面する。いくつか目立つ問題を挙げてみよう。

第1に、書名や雑誌名等の表記におけるイタリックと『 』の併用の問題がある。欧文ではイタリックが基本であるが、日本語文献では『 』という二重鍵括弧が慣習的に用いられる。和書では今後どうするのか。日本語のフォントにイタリック（斜体）を適用するか（今のコンピュータではそれは容易に可能）、それとも従来どおり『 』を用いるか（イタリック＝『 』、引用符＝「 」という等価関係を貫くか）。

第2に、欧文スタイルで用いられる in ～（～所収）の扱いである。英語では単行本に収録されている論文の場合、in を用いてその関係を明示するのが伝統的である。日本語文献でも「～所収」という言葉に置き換えることが可能であり、それほどややこしくはないのだが、この構造が十分に認識されていないのか、「所収」の2文字が省略される傾向がある。しかし英語の文献との整合性を保つには「～所収」を用いるべきではないか¹³。

第3に、「ピリオド主義」とも言うべき欧語文献の記述様式が日本では定着していない。欧語文献の文献表や参照リストでは、情報のブロックをピリオドで区切ることにより、構造を視覚的に明確にする。しかし、日本語文献ではピリオドを省略する慣行が優勢である。ピリオドを用いることで欧語文献との統一感を演出できるのだが、打たなくても区切りがわかるという現実もあり、悩ましい問題である。

このように、日本語文献との整合性の問題は、欧語のマニュアルを単純に翻案しただけでは解決できないので、どの規則を基準とし、どの程度まで統一を図るかという判断が常に求められる。ここでもまた、利用者のリテラシーが問われる。

なお、学会誌や大学紀要といったジャーナルのローカル・ルールとのすり合わせも重要

である。ジャーナルは独自の投稿規定を定めていることが多く、英語圏のマニュアルとは異なる約束事が優勢の場合もある。研究者や学生は、一般的なスタイル・マニュアルの理解に加え、自らが投稿する場の規則を把握して対応する必要がある。

6. まとめ

以上を踏まえ、論文やレポートを書くにあたって、サイテーションの方法を身につけるために研究者および学生に望まれることを、最後に整理しておきたい。

第1に、英語の句読法や大文字使用法など、スタイルの基礎を学ぶことである。スタイル・マニュアルは、言語の基本的な秩序の上に築かれている。その言語に関する基礎的なリテラシーを欠いたままでは、規則を正確に理解して運用することはできない。

第2に、少なくとも1つ、できれば2つの英語ベースのスタイル・マニュアルに精通するとよい。前述のように、これは外国語の習得に似ている。1つを知っているだけでは規則を絶対視してしまいがちだが、2つを知り、比較することで、相対化ができ、それぞれの規則の背後にある発想が見えやすくなる。

第3に、自分の専門分野における有力なスタイル、すなわち学会誌や投稿規定に通じることである。日本語文献との整合性を含め、自分の研究が置かれている制度的環境を理解することが必要である。

サイテーションを学ぶとは、マニュアルの規則を暗記することではない。先行する他者の知を扱い、自分の研究に位置づける適切な作法を身につけることだ。スタイルを守ることは研究の信頼度を保証する。サイテーションは、学生や研究者に求められる基本的なリテラシーである。

本稿は、公開セミナー「今、ライティング教育をめぐって知っておきたいこと」（青山学院大学外国語ラボラトリーとアカデミックライティングセンター共催，オンライン，2025年11月19日）で行なった同名の発表をまとめ直し，加筆をしたものである。

¹ 宮澤（2020）をまとめる際、宮澤は著作権を専門とする日本の大学教員に *citation* について尋ねたところ、同教員は *citation* という言葉自体を知らなかった。確かに著作権関連の英文の法律や条約をいろいろ調べても、*citation* という単語はみつからない。どうやら著作権の議論とは無縁の言葉・概念であるらしい。ただし、*legal citation* という表現は存在する。これは条文や判例を論文等で示すときの記述方法のことで、それをまとめた代表的なマニュアルが *The bluebook*（Harvard Law Review Association, 2025）である。

² 法学界の学説や判例では、「間接引用」や「要約引用」は、同一性保持権を侵害するから、日本の著作権法に触れるとの見方が有力だという。アカデミック・ライティングとの調整については、末宗（2018）、宮澤（2020, p. 104）、池田・金（2014, p. 91）を参照。

³ もう1つ、*MLA* と呼ばれて親しまれているアメリカ現代言語学会のハンドブックも

重要だが、ここでは割愛する (Modern Language Association of America, 2021)。

⁴ APA 方式では、もうひとつ、*narrative citation* が存在する。それは著者名は文中に置き、出版年（およびページ番号）のみをカッコに入れる方法である。マニュアルの邦訳（アメリカ心理学会、2020/2023）では、*parenthetical citation* を「カッコ引用」、*narrative citation* を「ナラティブ引用」とそれぞれ訳出している。

⁵ ただし、著者名・発行年方式を施した文章は、注を排除するものではない。説明注は適宜つけることができ、本稿でもそれを実践している。

⁶ ヘッドライン方式 (*headline-style capitalization*) とセンテンス方式 (*sentence-style capitalization*) の違いは、ウィンジェル (2009/2014) の訳註 (p. 122) を参照。要するに前者は新聞や雑誌の「見出し（ヘッドライン）」のように、大文字小文字混じりで記すが、後者は題名があたかも「センテンス」であるかのように、先頭の単語や固有名詞の頭文字を大文字にするだけで済ます。抵抗を感じる人もいるかもしれないが、もとの文献・資料がどちらの方式で記述していようと、そのまま転記するのではなく、スタイル・マニュアルの指定に従って書き改めることが求められる。

⁷ 特定のスタイル・マニュアルに準拠している学術誌（ジャーナル）がある場合、そのマニュアルの版が新しくなったからといって、常にその最新版が採用されるとは限らない。旧版が継続利用される場合もありうる。また、図書館の検索システムなどにも連携している文献管理ツールでも、さまざまなマニュアルの複数の版によるサイテーションで文献データが取得できる（ただし、正確とは限らないので注意）。

⁸ スタイル・マニュアルの版が改まると、ときどき、大きな方針変更が生じる。たとえば『シカゴ・マニュアル』において、著者名・発行年方式は、第 15 版 (2003) ではセンテンス方式の大文字使用法を採用していたのを、第 16 版 (2010) からヘッドライン方式に切り換えた（注・文献表方式の大文字使用法と一致させた）。これに伴い、トゥラビアンも、第 7 版 (2007) ではセンテンス方式だったのが、第 8 版 (2013) より、ヘッドライン方式に改められた。なお、トゥラビアンの邦訳 (2007/2012) は、第 7 版に基づくので、著者名・発行年方式がセンテンス方式の大文字使用法で記述されていることは、利用する際に留意が必要である（もちろん出版地を記すスタイルになっている）。ウィンジェル (2009/2014) の訳註 (p. 122) 参照。

⁹ このクイズは、動画『STAR WARS 問題』（宮澤、2023）で紹介されたものである。

¹⁰ ところで、『シカゴ・マニュアル』では、注や文献表でページを示すのに p. や pp. は付さず、算用数字のみを記述するので注意。

¹¹ たとえば、PhD はスペースで区切らない。出版社の HarperCollins も同様である。PowerPoint や YouTube など、コンピューターのソフトウェアやインターネットのサイト名などでも、そのような名称は存在し、論文・レポートで記述するときにもそれを踏襲する。そのほかピリオドのあとにスペースを取らない場合などもある。それぞれのマニュアルのインデックスで *space* や *spacing* の項目を探して詳細を調べてみるとよい。

¹² この違いを端的に説明したインスタグラムの動画がある (Kosugi, 2025)。

- ¹³ 雑誌掲載の論文・記事の場合，雑誌名はinで導かない．本質的な違いを考えてみよう．

参照リスト

- アメリカ心理学会．(2023)．『APA論文作成マニュアル』(第3版，前田樹海，江藤裕之訳)．医学書院．(原書刊行 2020)
- 池田眞朗，金安妃．(2024)．『法学系論文の書き方と文献検索引用法』．税務経理協会．
- ウィンジェル，R. J. (1994)．『音楽の文章術：論文・レポートの作成から表現の技法まで』[*Writing about music: An introductory guide*] (宮澤淳一，小倉眞理訳)．春秋社．(原書刊行 1990)
- ウィンジェル，R. J. (2014)．『改訂新版 音楽の文章術：論文・レポートの執筆から文献表記法まで』(宮澤淳一，小倉眞理訳)．春秋社．(原書刊行 2009)
- 末宗達行．(2018, 7月30日)．『学術論文における「引用」と著作権法における「引用」』．早稲田大学知的財産法研究所．<http://reclip.jp/2018/07/30/201808column/>
- トゥラビアン，K. L. (2012)．『シカゴ・スタイル：研究論文執筆マニュアル』(沼口隆，沼口好雄訳)．慶應義塾大学出版会．(原書刊行 2007)
- 宮澤淳一．(2014)．「文献・資料の書き方」．ウィンジェル著『改訂新版 音楽の文章術：論文・レポートの執筆から文献表記法まで』(宮澤淳一，小倉眞理訳，原書刊行 2009) 所収 (巻末 pp. 16–92)．春秋社．
- 宮澤淳一．(2020)．「研究発表の手続きと音楽著作権」(第6章)．[編者の明示なし]『音大生のための音楽著作権入門』所収 (pp. 85–105)．国立音楽大学．
- 宮澤淳一．(2023, 5月20日)．『STAR WARS 問題：アルファベット題名の記述法』．Prezi Video. <https://prezi.com/v/view/uUUDqHtk9I49jHQPPWkD/>
- American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). <https://doi.org/10.1037/0000165-000>
- Harvard Law Review Association et al. (2025). *The bluebook : A uniform system of citation* (22nd ed.).
- Kosugi, E. [@ellenkosugi]. (2025, December 4). 『volumeの意味を理解していますか?』[video]. Instagram. <https://www.instagram.com/p/DR1t3FakrUL/>
- Modern Language Association of America. (2021). *MLA handbook* (9th ed.).
- Turabian, K. (2018). *A manual for writers of research papers, theses, and dissertations: Chicago style for students and researchers* (9th ed.). University of Chicago Press.
- University of Chicago Press. (2024). *The Chicago manual of style* (18th ed.). <https://doi.org/10.7208/cmos18>
- University of Chicago Press. (n. d.). *What's new in the 18th edition*. The Chicago Manual of Style Online. <https://www.chicagomanualofstyle.org/help-tools/what-s-new.html>